AsiaNet 98951 （3011）

発展の10年における中国東方航空社員の輝き

【上海2022年11月23日新華社＝共同通信JBN】過去10年間、中国東方航空（China Eastern Airlines）は、航空会社を中核事業として、質の高い開発において大きな前進を遂げた。現在、同社は10万人以上の従業員を擁する世界第7の航空会社である。中国東方航空は、その路線網を世界170の国・地域の1062の就航都市に拡大しており、年間1億5000万人に航空旅行サービスを提供することができる。

さまざまな国の出身で、さまざまな種類の仕事に従事する中国東方航空の普通の社員は、同じ青空の夢を共有し、会社の成長を目にし、成長に寄与し、日々の仕事の重要性を理解している。

ここには、約2万時間を安全飛行している5つ星の機長、最近のインフルエンサーたち、すなわち、ソーシャルメディア上で「airplane bye-bye man（飛行機に手を振る人）」と呼ばれる航空機整備員、世界のイベントで競う最高のスキルを持つ客室乗務員、ここで夢を追求するために遠方から来た空の料理人がいる。これらの普通の社員は、彼らの経験、参加、経験によって、中国東方航空の発展の新たな弾みを付けている。

Wang Xiaoyong氏：中国製ワクチンの護衛者

Wang Xiaoyong機長は、2021年に新型コロナウイルスワクチンを輸送する中国初の貨物専用機である大陸間チャーター便に乗務した当時を思い起こし、非常に誇らしい気持ちになった。5つ星の機長として、一刻も早く「希望」を届けるためにチームを率いた。105万回分のCOVID-19ワクチンと注射器を運ぶ航空便がドミニカに到着しようとしていたとき、ドミニカの航空管制官は「中国に感謝し、乗務員に感謝し、中国のワクチンに感謝する」と空港対空通信チャンネルを介して述べた。その瞬間、Wang氏は世界の山や海を越えて距離を縮める自身の職業の崇高な使命と責任を痛感した。

▽Joao Carlos Juliani氏：ブラジルの機長は中国の三峡で故郷の味を見いだす

Juliani氏は中国で10年近く働いており、世界を飛び回る機内で、中国の「ネーブルオレンジの故郷」であるシ帰県のオレンジが彼の故郷のものと同じくらいおいしいと乗客が話しているのを耳にした。そこで彼は、屈原（Qu Yuan）の故郷でもある同県に足を運び、故郷の味を楽しんだ。果樹農家と協力し、中国の現代的農業とeコマースがいかに機能するかを目にすることで、彼は農村活性化後の中国人の生活の向上、壮大な長江、雄大な三峡ダム、素晴らしい中国文化を目の当たりにした。

▽Fraceschini Martina氏：マルコ・ポーロの伝承者

ローマ事業部のFraceschini Martina氏は、子供の頃から中国文化を愛し、知恵の心を持つことを願って、Ma Huixin（馬慧心）という素敵な中国名を自分に付けた。中国語とイタリア語の両方に堪能な彼女は、誇らしげに自分の仕事を友人や顧客に紹介することがよくある。「マルコ・ポーロはローマから中国に旅行するのに4年かかった。現在、中国東方航空のフライトでは、広胴型のエアバスA350機で熟睡するだけでよく、目覚めれば上海で、東方明珠テレビ塔が目に入る」COVID-19パンデミックの間、彼女はいくつかの航空支援に参加した。最も記憶に残っているのは、9人の中国の医療専門家と31トンの防疫物資を運ぶ最初の中国医療航空便で、これは2つの古代文明国である中国とイタリアの長期にわたる友好関係を反映したものである。

▽Ludwig Strobel氏：ドイツの空の料理人の、東洋の味への旅

ドイツ出身のLudwig Strobel氏は、西洋料理業界で40年にわたり総料理長を務めてきた。Shanghai Eastern Air Catering Companyに入社して以来、同氏は中国と西洋の料理文化の統合を研究し続け、料理のイノベーションにおけるブレークスルーを次々と達成した。飛行は文化の架け橋であり、味は感情の絆である。中国の同僚と共に、彼は中国と西洋の両方の乗客が中国東方航空のフライトで味覚の饗宴を楽しめるように、中国・西洋折衷の機内食を編み出した。

▽Chen Yifan氏：World Skills Competitionでのブレークスルーがトレーニングの研究開発を刺激する

研究開発センターの客室乗務員訓練インストラクターであるChen Yifan氏は、中国を代表して第44回World Skills Competition（世界技能コンペティション）に参加し、レストランサービスプロジェクト賞を受賞し、このプロジェクトで中国チームのゼロブレークスルーを達成した。

彼女は、World Skillsで学んだ国際サービスの概念と技術を利用して同社のサービス基準を推進し、第一線のサービス技術を向上させ、世界の乗客により良いサービスを提供するために「Exclusive Journey（高級な旅）」サービスコースを設計した。

▽Yuan Zhexun氏：創意工夫とイノベーションを備えた航空機の「心臓」のスペシャリスト

航空機エンジンエンジニアのYuan Zhexun氏は、航空機の「心臓」の健康診断に8年間取り組んできた。ボアスコープ技術によりエンジン内部の状態を検知し、不具合箇所を迅速に発見および測定し、品質管理を支援する。さらに、彼は過去の検出データをサポートとして使用して、ディープニューラルネットワークの画像検出アルゴリズムを反復し、AIテクノロジーによってエンジンの状態を正確に診断し、航空機の「鼓動」を安定させるために、より正確なメンテナンスの決定を行う。

▽Zhan Xiuxia氏：大興空港ではブラックテクノロジーがスマートトラベルを強化する

新しいゲートウエーである北京大興国際空港は、2019年9月25日に正式に運用が開始された。10年以上に及ぶ第一線での経験を持つ地上サービススタッフのZhan Xiuxia氏は、SF映画で見たシーンが日常生活の一部になっていることにしばしば驚かされている。ここ大興では、中国東方航空のスタッフがスマートグラスを着用し、インバウンドおよびアウトバウンドの乗客にサービスを提供している。このデバイスを使用すると、飛行機に未搭乗の乗客を迅速に見つけ、顔認識によってフライト情報を識別し、乗客に保安検査と搭乗を促すことができる。同時に、乗客は「1つのID」と顔をスキャンするだけで、保安検査から搭乗までの全プロセスを完了することができるため、旅行がインテリジェントかつ効率的なものになり、サービスの質が大幅に向上する。

▽Diego Benedetto氏：イタリア人機長の「中国生活」

40年前、イタリア人パイロットのDiego Benedetto氏は、飛行任務のために初めて中国を訪れた。40年後、彼は中国に戻り、中国東方航空でキャリアを続けることを選んだ。彼は過去40年間の中国の驚異的な発展に感銘を受け、「今、私は中国に住んでいる。まるで未来に住んでいるように感じる。中国は未来であり、中国製の航空機で世界中を飛ぶのを楽しみにしている」と述べた。

▽Magand Lucine Mathilde氏：フランス人客室乗務員の上海物語

中国語が大好きなフランス人のLucine Mathilde氏は、上海交通大学で3年間中国語を勉強した。流暢な中国語を話せることは、彼女が都市に溶け込むための最良の秘訣である。上海で、彼女は伴侶を見つけただけでなく、中国東方航空の客室乗務員にもなった。彼女は「中国とフランスを結ぶフライトが増加しつつあり、これは両国の関係がますます良好になり、両国間の距離が一層近づいていることを証明している」と語った。それは彼女が客室乗務員という仕事を選んだ理由でもある。彼女は、中国とフランスの間が「空の架け橋」を通じてますます接近しているのを目の当たりにしてきた。

▽瀬戸口朋子（Tomoko Setoguchi）氏：中国と日本を結ぶ虹の橋のための20年にわたる取り組み

瀬戸口朋子氏は中国東方航空日本支店鹿児島事業部に20年勤務している。彼女は上海が大好きで、中国東方航空での仕事によって、故郷の鹿児島と、世界で最も急速に成長している都市の1つである上海との関係が改善され、2つの都市が発展の機会を共有できることをとても幸運に感じている。過去20年間、瀬戸口氏は、より多くの日本の友人を運び、真の中国を見てもらうことに尽力してきた。

ソース：China Eastern Airlines